

最盛期の遣唐使を支えた詩僧・釈弁正

胡 志 昂

一、はじめに

『懷風藻』に漢詩が二篇収められた詩僧・弁正法師は俗姓を秦氏という。

秦氏は秦の始皇帝三世孫の孝武王の末裔を名乗る功満王それに融通王「一に弓月王と云う」を祖とする。『新撰姓氏録』左京・諸蕃に見える太秦公宿祢の記事に仲哀天皇八年に功満王が来朝し、その後、弓月王が応神天皇十四年に百廿七県の百姓を率いて帰化したと記す。その詳細は応神紀に記されている。弓月君は応神十四年に百濟から来朝したが、彼の率る百廿七県の百姓が加羅国に留まり、同十六年に平群木菟宿禰等と一緒にやってきたのである。仁徳天皇の時にこれら秦氏は諸郡に分けて置かれ、「波多」の姓を賜り「養蚕織絹」をして奉仕し、雄略天皇の御世秦氏の織り成した絹が山のようになり積み上がったので「うずまさ」の号を賜った。その後山城国葛野郡（今の京都市右京区太秦）や河内国讃良郡（今の寝屋川市太秦）など各地に土着した秦氏は、養蚕と機織の技術により強い経済力を築いた。秦氏と仏教との関係は推古天皇十一年（603）聖徳太子に仕

えた秦河勝が「蜂岡寺」（広隆寺）を建て、仏教の興隆に深く関わったのに遡る。弁正法師の秦河勝との系譜上の関係は不明だが、秦氏の出自が法師の経歴に影響を与えたことは疑いない。

弁正法師は大宝律令の成立した大宝元年（701）正月に任命され、同二年に出航した第七回遣唐使に従い、恐らくは請益僧として唐に渡った。伝によれば、長安に辿り着いた弁正は囲碁の嗜みが後の玄宗皇帝・李隆基に認められ、その知遇を得る。そして唐で還俗し、二人の息子の朝慶と朝元を儲け、弁正と朝慶は唐に留まったが、朝元は日本に帰朝し、医術と語学で朝廷に仕え、天平五年（734）ふたたび遣唐判官として入唐した。その時、故人となった父・弁正の由縁で玄宗皇帝から特に厚く賞賜を承ったという。

弁正と朝元の二代にわたる渡唐の記録は、古代の東アジアで行われた盛んな文化交流を象徴する遣隋・唐使の研究においても注目されているが、渡唐後の弁正の事跡が史料に乏しいこともあって、すべて研究し尽くされたとは必ずしもいえない。本稿は『懷風藻』に取められた弁正の伝記と漢詩二首に光を当て、作者の性格と学芸の造詣を明らかにすると共に、作品の成立背景、表現特色と作者の性

格を手掛かりに、唐代の文化人、わけても玄宗皇帝との関係について考察を試みる。そして、長安で活躍する弁正の存在が最盛期の遣唐使の活動に果たす役割にも言及したい。

二、「滑稽」の意味

『懷風藻』に四篇ある僧伝が撰者の特別な扱いを受けること、語句表現に中国高僧伝の影響が認められることは既に指摘されている。^{注1}ここでは弁正伝の異色性を先ず詩人の経歴と個性において考えてみる。

辨正法師者、俗姓秦氏。性滑稽、善談論。少年出家、頗洪玄学。太宝年中、遣学唐国。時遇李隆基龍潛之日、以善囲碁、屢見賞遇。有子朝慶・朝元、法師及慶在唐死。元歸本朝、仕至大夫。天平年中、拜入唐判官、到大唐見天子。天子以其父故、特優詔厚賞賜。還至本朝尋卒。

（弁正法師は、俗姓を秦氏といふ。性滑稽にして談論に善し。少年にして出家し、頗る玄学を洪いにす。太宝年中に、唐国に遣学す。時に李隆基が龍潛の日に遇ふ。囲碁を善くするを以ちて、しばしば賞遇せらる。子に朝慶・朝元有り。法師及び慶は、唐に在りて死す。元は本朝に帰り、仕へて大夫に至る。天平年中に、入唐判官に拜せらる。大唐に到りて、天子に見ゆ。天子その父の故を以ちて、特に優詔し、厚く賞賜す。本朝に還り至る。尋ぎて卒す。）

右に掲げた詩人小伝を見れば、前半に法師の事跡を記述し、後半は秦朝元の事を記すが、仏教関係の記述は少年の時に出家した弁正が大いに玄学を学んだことに触れている。聖徳太子が仏教を

導入された時から白鳳時代を通して三論宗が大変に盛んであったこと、三論宗の高僧らが魏晋六朝に流行した玄学と深い関わりをもつこと、更に今回の遣唐使船に帰朝後三論宗の三傳祖師となる道慈法師も同乗していたことなどを考え合わせれば、弁正も道済と同宗の僧侶ではなかったかと思われる。この点に関して後にまた触れる。

さて小伝の中心は弁正が囲碁を通して李隆基すなわち後の玄宗皇帝の知遇を得たことに置かれていること一読して明白である。最近、「明皇会棋図」という古画が注目され、そこに描かれた玄宗の碁の相手になる僧侶が弁正ではなかったかといわれるのも頷けるだろう。^{注2}一方、弁正の詩文を解説し詩人の才性を手掛かりに長安でのその活動を推知するには、小伝に記し伝えられた「性滑稽善談論」こそ重要な意味を有し、改めて検討する必要がある。

『史記・滑稽列伝』の巻頭に司馬遷は「滑稽」について次のように述べる。

孔子曰、六芸於治一也。礼以節人、楽以発和、書以道事、詩以達意、易以神化、春秋以道義。太史公曰、天道恢恢、豈不大哉。談言微中、亦可以解紛。

（孔子曰く、六芸の治に於けるは一なり。礼は以て人を節し、楽は以て和を発し、書は以て事を道ひ、詩は以て意を達し、易は以て神化をし、春秋は以て義を道く。太史公曰く、天道は恢恢たり、豈に大ならずや。談言微かに中るも、また以ては恢恢たり、豈に大ならずや。談言微かに中るも、また以て紛を解くべからん。）

儒学六経（易、書、詩、礼、楽、春秋）はそれぞれ異なる分野を対象とするが、治世に資する点では同じであると孔子はいう。

従って、太史公は続けて言う。世を導く天道は広く大きく、あらゆるものを包含する。談笑の言葉で理に適う事を巧みに表現する。これも世の紛糾を解くのに役立つ有用な才能なのである。ここで司馬遷は「滑稽」の意味を主に談笑（談言）で世事に対する正しい道理を婉曲に言い出す（微中）ことに見出し、これも世の紛糾を解決し治世に資する点で六経の学問に等しいという。

滑稽の字義および作法に関して、史記索引は「滑は乱をいい、稽は同であるから、滑稽は弁舌が上手く、非を是のように包め、是を非のようにふざけていい、巧みにももの異同を混交する」こと、また「滑稽はまるで俳諧のようだ」と説明する。つまり、太史公が滑稽者を列伝に立てた意図は、彼らが面白く可笑しい言い回しや機転の利くさわやかな弁舌を玩ぶだけでなく、世の混乱を救い、治世に資する点に主旨を置いていたが、その方法はあくまで物事の異同をわざと取り違えたり混同するようなおどけや滑稽なものに限る。この点、直言を聴かない君主に対して諫言する場合、実に重要なものであった。

では史記の列伝に挙げられた滑稽者を見てみよう。

まずは淳于髡。彼は齊の入り婿で身長は七尺未満だが、滑稽多辯であつて度々諸侯に使われたが、未だ嘗て侮られることがなかった。齊の威王が好んで姿を隠しては淫樂に溺れ、長夜の飲に耽けて政を卿大夫に任せつきりだったので、政治が荒廢し国土は諸侯に侵食され、国は存亡の危機に立たされていた。近臣は誰一人敢て諫めるものがない。そこで淳于髡は、王の庭に大鳥が居て三年経つても飛ばず鳴かずにいたが、それは何の鳥かと王に問うた。すると、王はこの鳥一たび飛ばば天を沖き、一たび鳴けば人

を驚かすといつて政に精を出すようになり、侵略された領土を悉く取り戻した。また楚兵が攻めてきた時、髡が王命を受けてうまく趙の救援軍十万人を引き出して楚兵を退却させた。ご褒美に威王が後宮に置酒して髡に酒を賜つたら、彼はどのぐらい飲めるかとの問いに答えて、自分は一斗飲んでも酔うし一石飲んでも酔うという。王の前で畏まつて飲むと一斗だけで酔うが、寛いで美人を抱えて飲むと十斗も行ける。でも飲みすぎると礼儀が乱れ、喜び過ぎると悲しみを招くといった。その言葉で王は長夜の飲を止め、齊王の善政が長く続いた。

また優孟は楚の樂人、多辯でよく談笑をし諷諫をした。時に楚の莊王は愛馬が死んだので群臣に命じて大夫と同等の葬式を挙げようとした。近臣が挙つて諫めたがこれ以上諫める者は死罪に処すといつて聞かない。そこで優孟は宮殿に入ると天を仰いで慟哭した。王は驚いて故を聞くと、王の愛馬だから大夫と同等の葬式にしてもまだ手薄い、王と同格の葬式にしてほしいと請う。王家の祖廟で諸国の使者を両側に並べせ、ご先祖様を前にして生け贄を供えれば、諸国も王が人を賤め馬を貴ぶことを知るであろうという。それを聞くとさすがの莊王も困つて死馬を普通の家畜として処分した。また優旃は秦の俳優で侏儒だが、よく道理に適う笑言をいう。嘗て始皇帝が御苑を大いに拡張し、東は函谷関、西は陳倉にまで拡張しようとしたが、優旃は、それはよろしい、苑中に野獸を多く放して、東から敵がやってきたら鹿どもに角で突かせればこと足りるといった。その言葉で始皇帝は御苑の拡充を止めたという。

司馬遷が滑稽列伝に挙げた三人を見れば、いずれも直言できな

い場合にあつて巧みに言方を換えて風諫したことが知られる。それが正しく「談言微中」の実例にほかならない。

改めて弁正伝を振り返って見れば、彼の付き合う相手も伝に見るかぎり、まずは李隆基という君王であつた。従つて「性滑稽善談論」といわれる弁正の滑稽もその言論ないし言語作品の考察を通して、唐都でのその事跡を推察する重要な鍵にならう。冗談半分だから直接的には言えないこともいうことができ、時には奇抜な着想や巧妙な言い回しで世の難題を解決することもある。それが史記のいう「滑稽」なのであつた。弁正にもそれに等しい滑稽な事績があつたのではなかつたか。

三、五言詩「与朝主人」の制作背景

『懷風藻』に収められた弁正の詩第一首は「与朝主人」と題する。

鐘鼓沸城闐、戎蕃預国親。神明今漢主、柔遠靜胡塵。

琴歌馬上怨、楊柳曲中春。唯有關山月、偏迎北塞人。

（鐘鼓城闐に沸き、戎蕃国親に預る。神明たり今の漢主、柔遠して胡塵を靜む。琴歌馬上の怨、楊柳曲中の春。ただ關山の月有るのみ、偏へに北塞の人を迎ふ。）

右に掲げた一首は唐朝の皇女が西方の異民族に嫁ぐことを詠んでいる。詩は前半に今上も漢帝と同じく皇女を異民族の王に嫁がせる懐柔策を取つて世の太平を囀ると歌い、後半は皇女送別の悲愁と遙か遠い道中の寂寥とを慰める楽曲の趣旨を並べ挙げた。ちなみに和親策で異民族に嫁いだ皇女は、漢代では武帝の時烏孫（ウイグル）王に嫁いだ劉細君と元帝の時匈奴王に嫁いだ王昭君が樂府曲によく歌われていたが、唐代では太宗皇帝の時吐蕃（チベット）

ト）王に文成公主、中宗の時も同じく吐蕃王に金城公主が嫁いでいる。

わけでも、金城公主の外嫁は神龍三年（七〇七）四月に「雍王守礼の女をもつて金城公主と為し吐蕃贊普に投降す」ることが決定され、景龍三年（七〇九）十月に吐蕃から嫁迎の使節が来京し、翌年正月に公主一行が吐蕃に向かつて発つたのである。『旧唐書・中宗紀』に

四年春正月丁丑、命左驍衛大將軍河源軍使楊矩為送金城公主入吐蕃使。己卯幸始平送金城公主歸吐蕃。二月壬午、曲赦咸陽始平為金城縣。

（四年の春正月丁丑、左驍衛大將軍河源軍使の楊矩を命じて金城公主を送る入吐蕃使と為す。己卯、始平に幸して金城公主の吐蕃に帰ぐを送る。二月壬午、咸陽を曲赦し、始平をして金城縣となす。）

と見える。その詳細は同書『吐蕃傳上』にもっと細かく記されている。この年（七一〇）の正月に中宗皇帝はまず勅命の「制」を下して、漢代に遡る和親柔遠策の意義を述べ、太宗皇帝が文成公主を吐蕃に嫁がせたことを讃えたとともに、娘を遠くへ嫁がせる親としての辛さを記している。そして金城公主を吐蕃まで送る使者を選定し、皇帝自ら都郊外の始平縣まで行幸して饞別の宴を張つた。

其月、帝幸始平縣以送公主。設帳殿於百頃泊側、引王公宰相及吐蕃使入宴中坐。酒闌、命吐蕃使進前、論以公主孩幼割慈遠嫁之旨、上悲泣歔歔。久之、因命從臣賦詩選別。曲赦始平縣大辟罪已下、百姓給復一年。改始平縣為金城縣、又改其

地為鳳池鄉愴別里。(その月、帝始平縣に幸して以て公主を送る。帳殿を百頃泊の側に設け、王公宰相及び吐蕃使を引いて宴中に入りて坐す。酒闌にして、吐蕃使を命じて前に進ませ、公主いまだ孩幼にして慈割遠嫁の旨を以て諭し、上悲泣歎歎す。これを久しくして、因りて從臣に命じて詩を賦し餞別せしむ。始平縣の大辟罪已下を曲赦し、百姓に給復すること一年。始平縣を改めて金城縣とす、またその地を改めて鳳池鄉愴別里と為す。)

長安二年(七〇二)から渡唐している弁正がこの重大事件を当然見聞していた。前掲詩に詠んでいるのは正にこの事にほかならない。当時太宗皇帝は自ら始平縣に行幸して涙を流しながら公主を送別したばかりでなく、從臣たちに命じて餞別の詩を賦せしめた。そのさい修文館大学士の李嶠をはじめ文学從臣たちの作った心製詩は、『文苑英華』に十七首も遺っている。

- ① 奉和聖製送金城公主適西蕃應制・李嶠
漢帝撫戎臣、絲言命錦輪。還將弄機女、遠嫁織皮人。
曲怨關山月、粧消道路塵。所嗟穠李樹、空对小榆春。
- ② 同前・崔湜
懷戎前策備、降女旧姻修。簫鼓辭家怨、旌旆出塞愁。
尚孩中念切、方遠御慈流。顧乏謀臣用、仍勞聖主憂。
- ③ 同前・劉憲
外館踰河右、行營指路岐。和親悲遠嫁、忍愛泣將離。
旌旆羌先風引、軒車洪水隨。那堪馬上曲、時向管中吹。
- ④ 同前・張說
青海和親日、潢星出降時。戎王子婿寵、漢国旧家慈。

春野開離宴、雲天起別詞。空彈馬上曲、詎減鳳樓思。

⑤ 同前・薛稷

天道能殊俗、深仁乃戢兵。懷荒寄赤子、忍愛鞠蒼生。
月下瓊娥出、星分宝婺行。関山馬上曲、相送不勝情。

⑥ 同前・閻朝隱

甥舅同親地、君臣厚帝鄉。還將貴公主、嫁与耨檀王。
鹵簿山川間、琵琶道路長。廻瞻父母国、日出在東方。

⑦ 同前・蘇頌

帝女出天津、和戎軫屬輪。川經斷腸望、地与析支隣。
奏曲風嘶馬、銜悲月伴人。旋知偃兵革、長是漢家親。

⑧ 同前・韋元且

柔遠安夷俗、和親重漢年。軍容旌節送、国命錦車傳。
梁曲悲千里、簫聲懸九天。唯應西海月、來就掌中圓。

⑨ 同前・徐堅

星漢下天孫、車服降殊蕃。匣中詞易切、馬上曲虛繁。
関塞移朱額、風塵闇錦軒。簫聲去日遠、萬里望河源。

⑩ 同前・崔日用

聖后經綸遠、謀臣計畫多。受降追漢策、築館許戎和。
俗化烏孫壘、春生積石河。六龍今出餞、雙鶴願為歌。

⑪ 同前・鄭愔

下嫁戎庭遠、和親漢礼優。茄聲出虜塞、蕭曲背秦樓。
貴主悲黃鶴、征人怨紫驄。皇情眷億兆、割念俯懷柔。

⑫ 同前・李適

絳河從遠聘、青海赴和親。月作臨邊曉、花為度隴春。
主歌悲顧鶴、帝策重安人。燭有瓊簫去、悠悠思錦輪。

⑬ 同前・馬懷素

帝子今何去、重姻適異方。離情愴宸掖、別路遶閨梁。
望絶園中柳、悲纏陌上桑。空餘怨黃鶴、東顧憶廻翔。

⑭ 同前。武平一

廣化三邊靜、通姻四海安。還將膝下愛、持副域中歡。
聖念飛玄藻、仙儀下白蘭。日斜征蓋沒、婦騎動鳴鑾。

⑮ 同前・徐彥伯

鳳展憐蕭曲、鸞闈念掌珍。羌庭遙築館、漢策重和親。
星軛銀河夕、花移玉樹春。聖心悽遠近、留蹕望征塵。

⑯ 同前・唐遠哲

皇恩睨下人、割愛遠和親。少女風遊宛、姮娥月去秦。
龍笛迎金勝、驪歌送錦輪。那堪桃李色、移向虜庭春。

⑰ 同前・沈佺期

金勝扶丹掖、銀河屬紫闈。那堪將鳳女、還以嫁烏孫。
玉就歌中怨、珠辭掌上恩。西戎非我匹、明主至公存。

ここに朝廷の主要な文臣がほとんど出揃ったこというまでもない。彼らの詩作が趣旨も表現も極めて類似しているのは、同じ事件を扱ったのもさることながら、中宗の「制」と悲泣歎歎して述べた御言葉が応製詩の表現領域を規定してしまったからである。試に和親柔遠策を表す「和親」の語を見れば、③④⑧⑪⑫⑮⑯に詠み込まれている。また皇女嫁入り道中の悲傷を歌う楽曲を「馬上曲」に絞って見ても③④⑥⑨に使われているというふうである。もう少し細く吟味すると、例えば冒頭一首、李嶠の詩を見てみよう。

漢帝戎臣を撫せんと、絲言して錦輪を命ず。還た弄機の女を

將て、遠く織皮の人に嫁かしむ。曲は関山の月を怨み、粧は道路の塵に消ゆ。嗟くところは穠李の樹、空しく小楡の春に對するなり。

詩中「漢帝」は唐の皇帝を指し、「戎臣を撫せん」とは遠い異国を懐柔する柔遠策をいう。「絲言」はその勅命。「弄機女」は天女の織姫、ここでは皇女を喩える。「織皮人」は毛皮を着用し生活風習が全く異なる異民族を表す。そして「関山月」は干燥した空気に冴えた月が関を夾んで聳え立つ荒涼たる山々を照らす光景をイメージした漢の横吹曲の名、遙か辺境の要塞を越えていく旅人の心中を悲しむ楽曲である。また「粧は道路の塵に消ゆ」とはすなわち異国へ嫁ぐ皇女の道中の辛苦と寂寥を紛らす為に馬上で演奏される琵琶琴曲「王昭君」の歌詞を踏まえた詩句である。そして「穠李」は王侯の子女の華やかな婚礼を歌う『詩経・召南』何彼穠矣を踏えて花嫁の美しい姿を桃の花に喩える表現だが、「小楡」は小楡谷、吐蕃に通ずる険しい山間にある地名、両者の対照は正に嘆かわしいというほかない。つまり、この一首は前半四句で遠い異国へ皇女を嫁がせる和親柔遠策を詠み、後半はそうした政策に伴う皇女と皇親の悲哀を西域由来の樂府歌曲に寄せながら表したのである。

改めて弁正の作を見れば、全体の構成は李嶠の詩とほとんど同じであること一目瞭然であろう。細部の違いを言えば、弁正の詩は公主を吐蕃に送り出す京都城内の光景から歌い出し、郊外で饒別の時に作られた李嶠らの詩と制作の場が異なる。もう一つ、弁正詩の特色は後半に多くの楽曲名を連ねたところにあった。すなわち「琴歌」とは琵琶曲「王昭君」をいい、馬上で演奏されるこの

曲は長い道中の寂しさを慰めるものだから「哀怨の声多し」（石崇「王明君辞序」といわれる。また「楊柳曲」は送別の歌、西域への道中は砂漠ばかりだから、春の到来を告げる楊柳の緑は曲の中から偲ぶしかないという趣旨。前掲応詔詩群では⑬も「望み絶ゆる園中の柳」と同じことを詠んでいる。そして「関山月」も先述したとおり殺伐とした情景を歌う横吹曲の名を織り込んでいるばかりか、尾句「北塞」も吐蕃に通ずる国境の要塞は「北」ではなく西にあるから、この「北」とは「背」の通用字で「塞に背く」とは要塞を出て行くこと、すなわち横吹曲「出塞」を暗に指す。応詔詩群でも②「旌旆、出塞の愁い」といい、⑪「茄声、虜塞を出づ」と歌っている。つまり、詩の後半はすべて楽曲名を連ねて異国に嫁がれて行く皇女の別離の悲傷を織り出しているが、これらの曲は応詔詩群にもあったのである。このことから作者の豊かな唐楽の嗜みを見て取れるのもさることながら、詩を与える相手も音楽の達人であったに違いないし、さらにいえば、相手の身分も相当なものでなければならぬであろう。ここにこの詩の与えられた「朝主人」の正体を解く一つの鍵があったことは見落とせない。

さて、唐の中宗の頃、朝廷の政治は暗愚だったが、官廷の詩壇は盛んであった。中宗皇帝は常時大勢の文学従臣を引き連れて事ある毎に応制詩を作らせる風流が流行っていた。なかでも李嶠の應制詩は当代随一といわれ、詩を学ぶ人々の手本となった。この時も李嶠らの應制詩群は恐らく作られた翌日から長安城内に伝えられ広まったに違いない。

このような当時の情勢を勘案すれば、弁正の詩はやはり李嶠ら

の應制詩を読んだ後の擬作と見たほうが妥当であろう。ならば、弁正詩は巧みにこれらの應制詩に擬して作ったことにはどんな意味があったのか。故意の物真似はみんなが「にせもの」と知っているから笑いを誘う。弁正の詩はどこまでも應制詩に擬しながら應制詩には成らない。詩を与える相手が「制」を下す皇帝ではなかったし、「制に應」じて作った詩ではなかったのである。これこそ「非を是のように言い包め、是を非のようにふざけて」という滑稽な作品ではなからうか。

四、「朝主人」と李隆基

弁正詩の与えられた「朝主人」とは誰なのか。これまで諸説あり未だ定説を見ないといえる。前節で見てきた詩の性格と表現の特色から結論を先に言うならば、この作は李嶠らの応詔詩に擬して作られ、やはり李隆基に献上したものだと考えざるを得ない。弁正がその知遇を得た玄宗こそ「尤知音律」と称せられる当代随一の笛（横吹曲）の名人であって、中宗皇帝の次に嘱望される皇位継承者だったからである。かつて横田健一氏は「朝主人」とは李隆基を指すのではないかと指摘されている。氏の推察は間違いない。ここに李隆基が「朝主人」と称せられる理由を三つ挙げてみる。

第一、垂拱元年（六八五）秋八月李隆基は睿宗皇帝の皇子として東都の洛陽に生れ、楚王に封せられた。天授三年（六九二）十月に出閣して府を開き、始めて官屬を置くが、年僅か七歳の彼が今を時めく則天武后一族の重鎮に対して朝廷を「吾家の朝堂」と言い切った。

年始七歳朔望車騎至朝堂、金吾將軍武懿宗忌上嚴整、訶排儀仗、因欲折之。上叱之曰、吾家朝堂、干汝何事、敢迫吾騎從。則天聞而特加寵異之。

（年始めて七歳、朔望に車騎朝堂に至る。金吾將軍の武懿宗、上の嚴整たるを忌み、儀仗を訶排し、因りてこれを折せんと欲す。上これを叱りて曰く、吾が家の朝堂、汝に何事か干はらん、敢へて吾が騎從を迫む。則天聞きて特に加へてこれを寵異す。）（旧唐書・玄宗紀）

時にまだ七歳の李隆基が毎月の朔日と十五日に車騎を整えて朝廷に上る。京の治安を司る金吾將軍の武懿宗がその儀仗があまりに整然と整えているのを忌み嫌い、これを怒鳴りちらして排除しようとしたら、李隆基は武懿宗を叱りつけて、「わが家の朝堂だから、お前と何の関係がある。吾の騎從にとやかく口を出すなんてとんでもない」と言い放った。祖母の則天女帝もこのことを聞くと至つて驚き、李隆基に特別寵愛を加えたという。それは紛れもなく朝堂の主人たる態度にはかならない。

第二、中宗は弘道元年（六八三）十二月に崩御した高宗の遺詔によりすぐに即位したが、翌年二月に早くも皇太后によつて廃せられ廬陵王に下された。代わりに睿宗が立てられ天授元年（六九〇）まで計六年間帝位に即いていた。則天武后が自ら皇帝となつた後も廃せられた睿宗は「皇嗣」として東宮に移り、皇太子であり続けた。李隆基が「吾家の朝堂」と言い放つたのはその間の出来事であった。聖歴元年（六九八）中宗が左遷先の房陵から帰京すると、睿宗が何度も「皇嗣」の位を中宗に譲りたいと申し出たので、中宗が皇太子に立てられたのである。従つて神龍元

年（七〇五）中宗が復位すると、睿宗は「皇太弟」に封じられた、が固辞して受けなかつた。朝廷では睿宗を世継と目するものが少なくない。特に神龍三年（七〇七）七月に中宗の子、皇太子李重俊の変が起きてから、後宮の跋扈が目にするものがあり、中宗の次には睿宗の諸子を皇位後継者と見込むものが多かつた。

第三、李隆基は神龍元年に衛尉少卿に任じられ、景龍二年（七〇八）四月に潞州別駕を兼任し、同十二月「銀青光祿大夫」が加わつてから、州内に白日昇天の黄龍が現れたり、狩獵に出たら紫の雲がその上を覆うなどの符瑞が十九件も数えた。

州境有黄龍白日昇天、嘗出畋有紫雲在其上、後從者望而得之、前後符瑞凡一十九事。

（州の境黄龍の白日に昇天する有り、嘗て畋に出でて紫雲のその上に在る有り、後より従う者望みてこれを得たり。前後する符瑞凡そ一十九事あり。）

加えて中宗の末年、王室に多事のため、李隆基は密かに材力の士を招いて有事に備えていた。彼らはみな李隆基を皇位継承者と見込んでいたこと当然であろう。弁正も李隆基の知遇を得た才士の一人であつたことは伝に記す通りである。

中宗末年、王室多故、上常陰引材力之士以自助。

（中宗末年、王室に多故たり。上常に陰かに材力の士を引き以て自助す。）

中宗末年すなわち景龍四年の王室に関わる異変を幾つか挙げれば、この年の正月に金城公主を吐蕃に送る使者として趙彦昭を指名したが彼は中宗の娘・安樂公主に頼んで他人と交替させた。李隆基が南郊祭祀に参列するため上京する際、占師に凶吉を占わせ

たら非常な吉兆を得た。その王邸の池から水気が立ち昇り、見たものはそれを「龍の氣」だといった。四月、中宗が李隆基邸に行幸し、池に樓船を作つて遊んだ。五月、前州司兵參軍の燕欽融が上書して皇后が国政を干渉し安樂公主や武延秀らが王朝の宗社を危くすると訴え、帝は怒つて彼を召し出してその場で撲殺させた。一方、安樂公主は皇太女になりたいため、皇后と共謀して中宗に鳩毒を進め、六月壬午、中宗ついに毒に遇つて崩御した。皇后韋氏は先ず中宗の崩御を秘して温王の李重茂を皇太子に立て、韋氏は皇太后として臨朝稱制する。間もなく臨淄王の李隆基が叔母の太平公主と手を組んで挙兵し、韋氏一味を誅殺した。

この間、李隆基の下に出入りしたものは道士の馮道力や處士の劉承祖など占兆を得意とするものが多かったが、時勢の赴くところを洞察する力があれば、次の皇位継承者に誰が相応しいことは自ずと知られるであらう。弁正は正しくこの年のおそらく二月に李嶠らの応制詩を擬して「与朝主人」詩を作り、李隆基の自覚を促していたのである。

それにしても、臨淄王の李隆基に対して詩を「与える」とは紛れもなく前例のないことに違いない。しかし、中宗末年に皇后韋氏ら一派が睿宗諸子に対する警戒が相当に強かったことを思えば、応制詩と同じ内容の作品を李隆基に奉るといふことは到底できまい。従つてここはやはり滑稽の才知を發揮してかかったほうが最適と判断されたのだろう。すなわち、異国の賓客であつた弁正は、李隆基と主従関係にはなく、あくまで親友に成り済まして、少年李隆基が朝廷を「我家の朝堂」と言い放つた故事を踏まえて、文学従臣らが中宗に奉つた応制詩を擬作することで、李隆基に従う

材力士人集団の、主君の皇位継承を待望する気持ちを代弁したものと見られるのである。

従つて、「与朝主人」と題するこの一首は正しく滑稽な擬作にはかならない。そして談笑の芸を發揮して治世に資する発言をすることは、史記に「滑稽列伝」が立てられた大きな理由であり、滑稽の本道といつても過言ではないことをここに改めて思い知らされるのである。

五、絶句「在唐憶本郷」に見る表現趣旨

現存する弁正の第二首の作品は絶句「在唐憶本郷」である。

在唐憶本郷（唐に在りて本郷を憶ふ）

日辺瞻日本、雲裏望雲端。遠遊勞遠国、長恨苦長安。

（日辺より日本を瞻、雲裏より雲端を望む。遠遊して遠国に勞し、長恨して長安に苦しむ。）

この絶句は詩語を巧みに使い、かつ平仄も近体詩律に合致する『懷風藻』中でも優れた出来栄えだといわれてしかるべきであろう。作者の「滑稽」な性格からここで特に注目したいのは、一首の首尾に用いられる「日辺」と「長安」の取合せである。詩語としての「日辺」は二つの意味があり、字面上の意味のほか、「長安」を意味する場合は、『世説新語』夙惠篇に見る晋の明帝の故事を踏まえる。

晋明帝數歲坐元帝膝上、有人從長安來。元帝問洛下消息、潯然流涕。明帝問、何以致泣？具以東渡意告之。因問明帝、汝意謂長安何如日遠？荅曰、日遠。不聞人從日邊來、居然可知。元帝異之、明日集群臣宴會、告以此意。更重問之、乃荅曰、

日近。元帝失色曰、爾何故異昨日之言邪？荅曰、挙目見日、不見長安。

（晋の明帝数歳にして元帝の膝上に坐せしとき、人有り長安より来る。元帝、洛下の消息を問ひ、潸然として涕を流す。明帝問ふ、何ゆえ泣くを致すや。具に東渡の意を以てこれに告ぐ。因りて明帝に問ふ、汝が意に謂らく、長安は日の遠きに何如？荅へて曰く、日遠し。人の日辺より来るを聞かず、居然として知るべし。元帝これを異とす。明日群臣を集めて宴会し、告ぐるにこの意を以てす。更に重ねてこれに問へば、乃ち荅へて曰く、日近しと。元帝色を失ひて曰く、爾、何故に昨日の言に異なるや？荅へて曰く、目を挙げれば日を見、長安を見ずと。）

世説新語・夙惠篇は早熟した機知を物語る小説である。東晋の明帝がまだ幼い時、父元帝の膝の上に座っていると、ちょうど長安からやってきたものがあるので、当時の都建業（今の南京）からは遠い「長安」と「日辺」とどちらが遠いかと聞かれた。すると、明帝は即座に日辺が遠いと答え、日辺から人がやってくることを聞いたこともないから知られるのだという。元帝は息子の機知に驚き、翌日宴を開いてこの事を参会者に披露したうえ、改めて同じ質問をすると明帝は掌を返すように日辺が近いという。頭を挙げれば日は見えるが、長安は見えないからだという答えは帝王と見立てたからである。その機知が座中をさらに驚かせ注目の的となった。このような機知は魏晋六朝の間流行した清談にあつて絶対不可欠なものであつたので、その答えが当時大勢の驚嘆を誘つたと同時に「長安」と「日辺」とを一種の同義語に仕上

げたのである。ここで留意すべきことは、同じ問題に対して異なる答えを出す時に振られる弁舌が正しく「非を言うことは是の若く、是を説くこと非の若し」という「滑稽」の才に通ずるのである。

従つて、この故事を踏まえた絶句の構想は全体として「滑稽」の機知を狙うものと予想される。そのためかこの作品は、「望郷」の切なるものもあるが、語戯に墮した結果、諧謔的な情緒が、読者をして微笑せしめる」とも評されている。それは一つに小伝にいう「滑稽」も影を落としているであろうが、他方この諧謔といわれるものこそ作者の自己表現であり、その苦渋の心境の吐露でもあつたに違いない。

いったい、絶句は短小な文芸形式で、詩語表現に典拠を踏まえる多重的意味が絡むと完全な理解に到達することは難しいといわれる。そのため詩が作られた場を特定する必要がある。この絶句は詩題に拠つて考えれば、同じく日本から渡唐したものの同士の集いが作詩の場になつたのではなかつたか。その場合、弁正と同時に渡唐した山上憶良の万葉集に見える「大唐にありし時、本郷を憶ひて作れる歌」が参考にならう。

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ（1・六三）

詩人小伝を手掛かりに思えば、弁正の望郷の念を誘う契機の一つは、息子朝元の帰朝であつたはずである。それは多治比県守を押使とする第八回遣唐使（養老元年・七一七）の来着と翌年の帰国であつた。この時、弁正と同じ遣唐使船で渡唐した釋道慈も帰国の途に着くことになつた。

『懷風藻』に釋道慈の詩が二篇収められ、その一首は同じく唐

に在って作つた五言絶句である。

在唐奉本国皇太子（唐に在りて本国の皇太子に奉る）

三宝持聖徳。百靈扶仙壽。壽共日月長。徳与天地久。

（三宝聖徳を持ち、百靈仙壽を扶く。壽は日月と共に長く、徳は天地とともに久しからむ。）

詩の奉られる皇太子は後の聖武天皇。和銅七年（七一四）に立太子されたが、この消息が唐にもたらされたのは第八回遣唐使によつてであろう。そしていよいよ日本に向つて発とうとする日、道慈は十六年間唐で修学を積み重ねてきた学識を胸中に懐き、帰朝後の自らの抱負を皇太子への祝福として詩に表出したのである。その傍に弁正と息子の朝元がいたであろう。弁正は朝元のことを道慈に頼んだものと思われる。弁正と道慈の関係は深い。もともとと女学に精通する弁正は道慈と同門の三論宗の仏徒であつた可能性が高い。二人の關係は在唐の間に更に深まつた。道慈小伝からその一端を挙げてみよう。

時唐簡于国中義学高僧一百人、請入宮中、令講仁王般若。法師学業穎秀、預入選中。唐王憐其遠学、特加優賞。

（時に唐国中に義学の高僧一百人を簡び、宮中に請入して、仁王般若を講かしむ。法師学業穎秀にして、選中に預り入る。唐王その遠学を憐び、特に優賞を加ふ。）

道慈法師の在唐中に、唐の都では国中から義学の高僧を百人選抜して宮中に請じ入れ「仁王般若経」を講釈してもらおうという重要な出来事があつた。道慈法師も学業優秀のため選拔され、宮中で講経をし、皇帝が遠い国から留学に来た道慈法師に特別に目を掛け、優れたご褒美を与えたのである。

これは何時の出来事だつたか知らないが、学業は積むほど深まることを思えば、法師の帰朝に比較的近い留学の後期ではなかつたかと思われる。李隆基は景龍四年（七一〇）のクーデター直後皇太子に立てられ朝廷の政治を握り、そして先天元年（七二二）に即位して玄宗皇帝となつた。道慈法師の宮中講経は玄宗朝の出来事であつた確率が高い。だとすれば、玄宗の側近に同じ留学経験をもつ弁正がいたことの意味は大きい。弁正はその時、改めて道慈と旧交を温めたに違いない。

道慈の絶句は弁正の一首と同じ場で作られたなら、そこに弁正に対する気遣い、すなわち彼に代わつて留学の成果を本国に持ち帰つて発揚するという意思表示も包含される。対して、弁正の詩は「日辺」も「雲裏」も唐都の長安、仙人の目指す帝郷を表す詩語ではあつたが、字面上の意味なら「日辺」は遙か遠いところであり、「雲裏」も遠くを見通せる視界のよいところではない。自分はこの「日本」を望み懐かしく偲んでいると歌うのである。遠い異国で遊学する苦勞は自分も道慈も同じく経験したが、本来なら僧侶としての留学は、世間諸苦を解脱する修行であつたはずなのに、自分は唐には来たものの還俗してしまい、世俗の愛欲煩惱に悩まれるから、「長安」で生離死別を悲しみ憂う「長恨」に苦しんでいる。ここに長安で遙か彼方にある故郷の日本を思う望郷の念とともに、世間諸苦を離脱する修行のために渡唐しながら還俗し生離愛苦の憂愁に付き纏われるという、いわば異国の還俗僧の自嘲も含んで現れているであろう。と同時に、日、雲、遠、長、長といった同字反復の表現は単なる言葉のテクニクに止まらず、その間に対比と逆転を盛り込むことで、自らの苦渋に満

ちた複雑な心境を「滑稽」に紛れて表現しているのである。

六、むすび

弁正が李隆基の知遇を得たのは、囲碁の腕に止まらず、その詩文・音楽の嗜みや滑稽の才も大きな理由であった。わけても、滑稽・談笑の才に求められる弁舌と機知は、弁正に様々な発言の機会をもたらした。唐王朝の政治や外交政策に関わることもあった。そうした彼の存在が玄宗朝の対外（遣唐使）政策に大きな影響を及ぼすことは必至であろう。

『旧唐書・日本伝』に弁正の加わった第七回遣唐使のことを始めて記し、押使の粟田真人に関してその冠位、装束、素養に至ってこと細かく書き留めている。そこから遣唐使節に対する高い関心が伺える。また養老元年（七一七、開元5年）の第八回遣唐使（多治比県守押使）が四門博士による経典教授を要請したり、皇帝の恩賜を叩いて大量の函書を購入して海に浮かべて持ち帰った。この時の留学生から阿倍仲麻呂が唐の科挙に合格して高官に登り、吉備真備が名門貴族の出身でないにもかかわらず大臣にまで出世して、奈良朝の政治文化に大きな足跡を残したなど、人材を輩出させた。こと第八回遣唐使の活躍ぶりに関して藤原宇合の存在が大きかったのではないかと考えたこともあったが、玄宗朝の出来事には弁正がいたことの影響がもっと直接であったことはいふたがいない。

このことは、天平五年（七三三、開元21年）の第九回遣唐使に加わった秦朝元に対して、玄宗がその父・弁正のために「特に優詔し、厚く賞賜」したことを見れば明らかだが、それだけではな

い。遣唐大使の多治比広成らが帰路海難に遭い、玄宗が使者らの安否を気遣う旨を「勅日本国王書」に綴った。そこに日本遣唐使に対する懇切な関心が読み取れるのであるが、そんな時（注10）も弁正の遺した記憶が玄宗の心中に浮かんたのではないだろうか。

注

- 1 横田健一「懐風藻」所載僧伝考」（『白鳳天平の世界』創元社、一九七三年）、小島憲之「漢語あそび——『懐風藻』私家伝をめぐって——」（『文学』第五十七巻第一号、一九八九年一月、後「漢語逍遙」岩波書店、一九九八年所収）、山口敦史「東アジアの漢詩と僧侶——『懐風藻』僧伝研究序説」（辰巳正明編『懐風藻・漢字文化圏の中の日本古代漢詩』笠間書院、二〇〇〇年）など。
- 2 研究発表・胡志昂「释智藏の詩と吳越文化」（東アジア比較文化国際会議「東アジア文化の継承と止揚——東アジア共同体の文化基盤の形成を中心に——」二〇〇六年九月於中国復旦大学）
- 3 王勇「明皇会棋図」解説」（『遣唐使・遣唐使一四〇〇周年記念国際シンポジウム』配布資料、二〇〇七年九月）。
- 4 拙稿「李嶠百詠」序説——その性格・評価と受容をめぐって」（『和漢比較文学』第三十二号、二〇〇四年四月）
- 5 高潤生「懐風藻」と中国文学——釈弁正「与朝主人」詩考」（『皇学館論叢』第二七巻五号、一九九四年三月）
- 6 横田健一前掲書。
- 7 村上哲見「懐風藻」の韻文論的考察」（『中国古典研究』第四二集、二〇〇一年三月）
- 8 杉本行夫注釈「懐風藻」（弘文堂書房、一九四三年）
- 9 拙稿「奈良王朝の『墨翰之宗』——藤原宇合」（池田利夫編『野鶴群芳・古代中世国文学論集』笠間書院、二〇〇二年十月）

10 張九齡『曲江集』卷十二。

付記：本稿は二〇〇八年九月韓国の高麗大学で行われた東アジア比較文化国際会議「東アジアの人文伝統と文化力学」に発表した原稿「東アジアを渡り歩いた文化人釈弁正」を大幅に加筆したものである。

Bensho : a Japanese poet who supported the golden age
of the Delegation to Tang Dynasty

HU, Zhiang